

Title	日本で生きる日本語学習者のジャンルの獲得
Author(s)	大平, 幸
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/34544
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (大平 幸)

論文題名 日本で生きる日本語学習者のジャンルの獲得

論文内容の要旨

1章「序論」では、ここ数年の日本語教育全体においても顕著になってきている、外国人の生活への視点の転換の流れについて述べた。その大きな要因として日本に住む外国人の多様化が進み、国や地域を越えた人の移動とその状況を取り巻く問題が大きくとりあげられるようになったことがあげられる。このような日本における外国人受け入れの現状と、筆者自身の問題意識にもとづき、本研究の目的を、日本に住む学習者のある特定の活動領域における実践への参加がどのようにして可能になっていくのか、またかれらが参加可能な領域をどのようにして広げていくのかを明らかにすることとした。

2章「先行研究」では、まず日本語教育において、日本で暮らす外国人の生活に必要なことばの捉え方がどのように変遷してきたかを概観した。ヴァリエーション研究の視点からの留学生に対する日本語教育、特定の目的のための日本語教育(JSP)、生活者のための日本語の3つの分野における生活に必要なことばについて見ていく中で、教育あるいは研究の視点が、教室の中から生活へ向けられるようになってきていることがわかった。また、そのような変化の中で、言語観や言語能力観や学習観の捉え直しが必要となってきたことが明らかになった。特に、日本に住む外国人の多様化によって大きく取り上げられるようになった生活者としての外国人に対する日本語教育分野では、従来とは異なる言語や言語能力についての見方が示されている。このような、新たな学習観や言語能力観は、人間の発達を社会という文脈においてとらえる社会文化的アプローチや、ダイアロジカル・アプローチにおける学習観や能力と呼応するものである。よって、第2章の後半では、第二言語習得研究に大きな影響を与えたヴィゴツキーの社会文化的アプローチと、バフチンの対話原理のアイデアをもとにしたダイアロジカル・アプローチを取り上げ、これらのアプローチがもたらす新たな視点について論じた。

3章「分析の枠組み」では、分析の枠組みとして、ことばのジャンル(バフチン1988)という概念を提示した。ジャンルの概念を用いて学習者の日本語習得の過程を見ることは、多様な活動領域、その領域における実践に参加する学習者に目を向けることになる。つまりジャンルという概念により、人間と社会的文脈を一つの単位として分析することが可能になり、学習者のことばの習得を、さまざまな活動領域、その領域における実践、社会との関連の中で検討することができるようになる。さらに、本研究では、実践コミュニティ(レイヴ & ウェンガー 1993)の枠組みを援用する。このようにジャンルと実践コミュニティを分析の枠組みとすることで、ことばの習得をある特定の知識や技術の獲得ではなく、実践への参加の仕方の変化、コミュニティにおける人と人、人との、人とコミュニティの関係性の変化としてとらえ、その人の生活において、その人の人生に沿って、人とことばとコミュニティの関係において検討することが可能になる。この分析の視座に基づき、4章と5章と6章における調査と分析を行った。

4章「ひろげる」では、日本に住む学習者のある特定の活動領域における実践への参加がどのようにして可能になっていくのか、またかれらが参加可能な領域をどのようにして広げていくのかを明らかにするため、既に複数のジャンルを習得した2人の日本語学習者を事例としてかれらの日本語習得の軌跡を記述した。調査はインタビューによって行い、協力者の置かれた文脈、特にコミュニティにおける実践への参加を視野に入れつつ分析を行った。まず、本研究の協力者は、特定の活動領域における実践への参加によってあるジャンルを身につけ、さらに活動領域間の移動を重ねることにより複数のジャンルを身につけていた。また、それらの実践において他者の声を専有(Hall 1995)することにより、ジャンルを獲得していた。さらにそのようにして身につけたことばを媒介にして他者との関係性の構築を行っていた。このように、学習者は決して文脈から切り離された語彙項目を記憶することによって生活に必要なことばを身につけているのではなく、実践の中において、コミュニティにおける実践への参加のリソースとしてことばや

振る舞い方を身につけていると言える。

5章「なじむ」では、ある特定の活動領域に焦点をあて、学習者の実践への参加がどのようにして可能になっているのかをフィールドでの観察を行うことによって、より詳細に明らかにすることを試みた。フィールドであるA工業短期大学は、主に自動車業界で活躍できる人材を育成することを目的とした大学である。協力者は、2年間日本語学校で日本語を学んだあと、A工業短期大学に入学した学生である。

まず最初に、協力者が1年生の10月時点での実習授業での観察から、実習授業におけるやり取りの特徴を明らかにし、協力者の言語使用との関連について見ていった。実習授業中のやり取りには、自動車に関する用語が多く含まれていたが、教科書で学ばれる専門用語と、日常のやり取りにおいて使用される業界用語の使用には違いがみられた。まず、この時点において車の整備に関する専門用語は、協力者にとっては教科書のことばにとどまっていた。

一方、車や整備業界について語ることやそのためのことばは、協力者が友人や教師の間で繰り返される現場関係者の業界話に参加するための重要なリソースとなっていた。また、そのやり取りの中で使用される業界用語や、それらにともなう価値づけは、協力者にも共有され、将来を選択するための手がかりともなっていた。

上記をふまえ、次に業界用語に見られたような、ことばやそのことばに対する意味や価値づけの共有がどのように行われていたのかをより詳細に知るため、協力者と友人のやり取りを中心に分析をおこなった。また、この時点で教科書のことばにとどまっている専門用語については、どのようにしてCKにとって生活において意味のあることばとなっていくのか、その過程を明らかにすることを試みた。

業界用語の使用に見られた意味や価値づけの共有は、他者とのやり取りの中でさまざまな情報にアクセスすることによって可能になっていた。また、他者とともにあるものやことについて語る際、評価的なやり取りが繰り返し行われていた。そのようなやり取りを継続的に行う中で、特定の他者との間に特定のやり取りのパターンが生まれ、そのような決まったパターンのやり取りを繰り返し行う中で、特定の他者との間でのみ通用する意味や価値の共有が行われていた。

一方、1年の10月の段階で教科書や試験のことばにとどまっている専門用語が、生活において意味のあることばになっていく過程においては、CKが自分の生活と交差する文脈においてこれらの専門用語と再度出会い、その文脈においてそれらのことばを語り直すということが行われていた。また、そのようにして使用される中で、最初は教科書のことばであった専門用語は、学校というコミュニティにおいてCKが他のメンバーと対等になることを可能にする重要なリソースになっていた。このような変化は、CKのみならず班というコミュニティ全体にも変化をもたらすものであった。上記のように、専門用語がコミュニティで共有されたレパートリーとなっていく過程は、実習授業における班がコミュニティとして機能し、成長していく過程でもあり、また、そのレパートリーを実践の中で自分のものとしていくことでメンバーがメンバーとなっていく過程でもあった。

6章「こえる」では、ある活動領域からある活動領域間の移動に焦点をあてた。協力者が生活の場の移動をどう経験するのかを移動にともなう困難に注目して明らかにし、最終的に、その経験がその人の日本語の習得のプロセスにおいてどのように位置づけられ、日本語の習得とどう関係するのかについて検討を行った。調査は、半構造化インタビューを用いて行った。協力者は来日後日本語学校で学び、その後も日本で生活している学習者8名である。協力者たちは、生活の場の移動にともない、言語習得あるいは言語使用上の困難を感じていた。また、1つの生活の場においても従事する活動の複雑化によって使用することばが複雑になるという経験をしていた。しかし、活動領域間の移動やある活動領域における活動の複雑化は、一方では協力者たちに困難を感じさせ時に負担を強いるものでありながら、もう一方でさらなる熟達のプロセスへと導く契機としての機能を果たすものとなっていた。また、それにとともなう気づきは、活動領域間の移動の経験を経ることによって、ある特定の場に限らず、それ以外の場所においても適応可能なものへと変化していた。つまり、そのような柔軟性を持った気づきは、人の実践への参加の仕方を変化させ、ある特定の文脈を越えてさらなる領域への移動を可能にするものとなっていた。また、その過程において、協力者たちは自分のことば対し、新たな意味づけを行っていた。学習者はそのようにして自分の使用することばの選択肢を増やし、自分で選択したことばによって周りの環境に働きかけ、自分たちの生きる場を広げていた。

7章「結論」では、上記において明らかになったことをもとに、日本に住む学習者のある特定の活動領域における実践への参加がどのようにして可能になっていくのか、そして、かれらが参加可能な領域をどのようにして広げていくのか、最後に、生きて生活する人にとってのことばがどのようなものかについて議論を行った。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (大 平 幸)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授 西 口 光 一
	副 査	教 授 岩 根 久
	副 査	准教授 佐 藤 彰

論文審査の結果の要旨

従来第二言語の習得と教育は、単一言語を前提としてそのシステムや規範、つまり言語能力や伝達能力を身につけることを目標として行われてきた。そうしたパラダイムでは、学習者が習得すべき知識はあらかじめ用意されており、教育と学習指導はそうした知識を有効に学習者に習得させることに専念していた。しかしながら、近年、渡日し日本で生活をする外国人の多様性が顕著になりまた日本語教育でもそうした面が注目され、かれらが日々の暮らしと仕事などを含めた広い意味での生活を運営するためには、従来の日本語教育の内容と方法では不十分であることが指摘されるようになった。本論文の筆者はそのような認識に立ち、一般に日本語習得の主要な場所と考えられている教室から一旦離れ、日本語学習者が生きている実際の生活の場に注目して、生活の場の移動という側面も含めて、そうした場で学習者がどのような活動にどのように出会い、そこで活動への参加の様態と言葉使用の様態を変化させながらどのように日本語を習得しているかの記述を試みた。

筆者は、日本語教育における生活のための言葉に関する研究から論を起し、平行して第二言語の能力を見直す議論を包括的に論じている。そして、それらを踏まえて、本研究のための分析の視座としてバフチンのことばのジャンルの概念と、レイヴとウェンガーの正統的周辺参加論における実践のコミュニティの概念を提示している。このような分析の枠組は当該の現象を記述するために非常に適切なものであると見ることができる。

そうした上で筆者は、きわめて精力的な調査に乗り出し、テーマの現象に関して重要ないくつかの側面を描き出すことに成功している。すなわち、第4章では、来日6年と8年という2人の外国人青年を対象として計8時間半に及ぶインタビューを行い、かれらの日本語学校での日本語学習から現在(大学4年生と会社員)に至るまでの間にさまざまな生活の場を経験することを通して自身の生活のための日本語を拡充していく様子を微視的なエピソードの記述なども含めて見事に活写している。続く第5章では、準備的な調査を含めて3年間にわたり、某工業短期大学で自動車の整備技術等を学ぶ外国人青年をフィールド観察とインタビューで追い、調査協力者が専攻科を修了して就職するまでの軌跡を辿っている。そして、協力者がさまざまな活動に参加する中で、専門的な知識と技能を獲得し、その領域の人間としての知識と人格の形成を背景としつつ、言語的な側面として専門用語と業界用語について新たな意味や価値の獲得を含みながらそれらを自身のものとしていく過程が実に見事に描かれている。そして、第6章では、生活の場の移動に焦点を当てて8人の協力者にインタビューを行い、移動に伴う困難の状況がさらなる熟達のプロセスに導く契機として機能していることなどが明らかにされている。第7章では、調査で明らかになったことを踏まえて包括的な議論を行っている。

このように本論文は、日本語学習者が実際の生活の場で日本語を習得していく道程を多角的に捉えることに成功している。日本語教育に本研究の知見をどのように結びつけるかが明瞭に論じられていないことや、一部用語の使用が厳密性に欠けること、本文での資料引用とコーディングし番号付けされた資料との関係が明示的に言及されていないことなどいくつかの課題はあるが、本論文の価値を損なうものではない。

以上のような理由で、本論文は博士(言語文化学)の学位論文として価値のあるものと認める。